

# 四国農学連報

第 23 号  
校 盟 者 大 学 校 学 生 連 集 校 会  
行 業 連 集 校 会  
農 業 大 学 校 学 生 連 集 校 会  
地 区 農 業 大 学 校 学 生 連 集 校 会  
四 国 農 学 大 学 校 学 生 連 集 校 会  
編 立 農 業 大 学 校 学 生 連 集 校 会  
愛 媛 県 立 農 業 大 学 校 学 生 連 集 校 会

## 農大での役割と

### 今後のビジョン

四国地区農業大学校学生連盟会長  
愛媛県立農業大学校学生自治会長

田 房 開



私は、昨年四月から愛媛県立農業大学校の学生自治会長に就任しました。当初は自分が自治

会長をやっているのか自信がありませんでした。それに加え、今年度は愛媛農大が四国農学連の当番県で四国自治会の代表としての役割もあり、不安ばかりでした。しかし、周りをサポートしてくれる自治会役員や先生方のおかげでスポーツ大会や意見交換会など何とか無事に終えることができました。自治会の仕事は一人ではできません。役員みんなが意見を出し合い、支

えあつて一つの組織が成り立っていることに気づくことができました。

四国農学連スポーツ大会だけではなく、農大のメイン行事である収穫祭の運営も学生達で協力して行い、昨年の来場者数を大きく上回るお客さんを迎えし、大成功で終えることができました。

私は農大卒業後、就農して独り立ちを考えています。そのためには、将来のビジョンがないとうまくやっていると、今考えているビジョンは次のとおりです。

新規就農者として最初にするのは、せとかの苗を定植することから始まります。併せて、現在育成しているせとかや愛媛県育成品種の甘平、紅まどんな等の高糖度品種の柑橘の管理を徹底してやっていこうと思っています。

私は果樹農家としてやっていくと言いましたが、それは通過点に過ぎませ

ん。果樹経営に自信がつけられたら次のステップとして果樹と野菜の複合経営を行おうと考えています。果樹栽培の空いた時間に玉ねぎ、ナス、キュウリなどの管理を行い、日々時間の無駄なく効率的な生産をしたいと思っています。一年目や二年目がうまくいかなくても、コツコツ努力を積み重ね、周りの農家に負けないくらい、いやそれ以上の収益を得たいです。

しかし、私は農業の厳しさや社会の現実をまだ実感しておらず、まだまだ未熟で、植物に例えるならば芽が出たばかりです。やがて私は色々な経験をして成長していくでしょう。小さかった芽は大きく太く育ち、立派な木になれることを信じて自分の道をひたすら突き進んでいきたいと思っています。

この愛媛県立農業大学校で学んだ事は決して無駄ではありません。農業の知識・技術・体力を身につけられる最適な場所でした。そして何より、大切な親友との学校生活を共に過ごした2年間、その中で深く絆を深め、団結を高めることができました。今後も農業に関わっている以上、親友たちを大切に、県内外の情報の共有などもできればと思っています。

最後に、自治会長という立場を務めてみて、改めてリーダーは責任の重みやプレッシャーが重なる大変な役割だと感じました。しかし、がむしゃらに取り組んでみて、不安でいっぱいだった一年前とは比べ大きく成長できたと思っています。今回の経験で、将来の農業組織での役員やリーダーを任せられても対応できる気がしています。この自信を常に持ち続け、何事にも率先して行動できる人間になりたいです。



自治会メンバーと

いつでも夢を

愛媛県立農業大学校

校長 三木伸司



「夢なき者に成功なし」、これは、幕末の思想家吉田松陰の言葉とされています。夢のない者に理想はなく、理想のない者に計画はなく、計画のない者に実行はなく、実行のない者に成功はないということですが。

大きな夢、小さな夢、人は誰でも多くの夢を持っており、これらは日々変化しながら好奇心をかき立て、興味や意欲を喚起します。

学生の皆さんは、まさに夢を抱き、農業大学校に入学して学んでいること

と思います。二年間という短い期間に、農業経営に必要な専門的な知識・高度な技術、指導力、創造力、適応力を身に付けるため、座学、実習等密度の濃い授業に取り組みなければなりません。実践教育を重んじる農業大学校では、授業の内容はすぐに役立つものが多く、農業に関係する者にとってはどれも興味深いものばかりで、自身の財産となるものです。金銀財宝やお金等の形ある財産は、盗難や災害で容易に失います。しかし、自らの努力で身に着けた知識・技術・経験・人脈等の財産は決して失うことはなく、むしろ窮地に立った時にこそ役立つものでもあります。財産の価値に気づくことができること、陶芸に関心のない人が高価な茶碗を手にしても、ぞんざいに扱うか捨ててしまうようなものに扱われるか、言葉が換えれば、財産を蓄え、夢を実現できるチャンスを与えられています。このことを自覚し、好奇

心を持って課業に取り組むことにより、知識や技術はもとより、幅広い視野を持ち、物事を正しく判断する能力を養うことができます。

今、世の中は大きく変化しています。特に昨年は、イギリスのEU離脱、アメリカ合衆国の大統領選挙結果にみられるように、多くの専門家が予測できなかったことが起こりました。国内では、規模拡大や生産費の低減等競争力の強い農業を確立するために農政改革が推し進められようとしています。これからの農業者には、取り巻く情勢の大きな変化に的確に対応していくことが求められます。情報が氾濫する中で、これに流されないためには、正確な情報を迅速に収集し判断しなければなりません。また判断をもとに実践する場合、個人では限界があるので、周囲の力を頼ること（人脈の活用）も必要でしょう。

本校の要覧には、「夢を育て大地を耕す」と大きく表記してあります。短い学生生活ではありますが、出会いを大切に、いつでも夢を持ち、育み、語り合い、切磋琢磨して、その実現に向けて自ら考え行動できる人、地域農業に貢献できる人になってください。

農大での二年間

高知県立農業大学校学生自治会長 園芸学科二年 野菜専攻

高橋直希



私の農大での二年間は自治会長をさせて頂くなど、忙しくも充実した日々を過ごすことができました。

二年間の思い出の中で一番印象に残っているのは、人生初めての寮生活でした。私は少し人見知りをするのがあり、寮生活で友達ができるのか心配でした。しかし農大のみんなは優しく話しかけてくれ、放課後一緒にバレーやサッカー、バスケットボールなどをしたことで、すぐに仲良くなることができました。

また、よさこい祭りや四国農学連スポーツ大会、そして農大祭も良い思い出となっています。

よさこい祭りは、夏に行われる高知県の夏の風物詩で、一、二年生のほぼ全員が参加します。一年生の時、人生で初めてのよさこい祭りの参加で最初はうまく踊れるのか心配でしたが、先輩や同級生のおかげで楽しく最後まで踊ることができてうれしかったです。二年生の時は、自治会長としてよさこいに参加しました。私は二年生として



ナスの収穫

一年生を引っ張っていかなくてはなりませんでしたが、思うようにいかず迷惑さえかけていました。しかし、協力してくれる仲間の支えで、農大の最後によさこいを無事に終えることができたときには感無量でした。

四国農学連スポーツ大会では、中学校からやっていた野球を選択しました。一年生の時はピッチャーとショートをさせてもらい、打順では、二番バッターで試合に出場しました。私が投げた試合では、先輩達が点を取ってくれたため、勝つことができ楽しい野球をすることができました。二年生の時には、ピッチャーとセンターをする事になり大変でしたが、二年連続で、準優勝することができ、いい思い出となっています。

農大祭では、自治会長として、最初の挨拶や司会をしました。私は初めての事が多かったので本番でうまくできるのか、不安で眠れなかったことが多々ありました。しかし本番では、最初の挨拶も司会も思った以上にうまく



井上優都

高知県立農業大学校  
畜産学科 一年

### 土佐あかうしの 担い手目指す

いき、大成功で終わる事ができました。さらに、課題解決学習としてのプロジェクト活動は、地元安芸市の特産であるナスを初めて栽培した事が良い思い出です。初めての事はばかりで最初は上手くできませんでしたが、先生方や先輩にアドバイスをいただき、上手く栽培することができました。時には友達と言いかいになりぶつかることもありましたが、その事もとてもいい経験になったと感じています。

振りかえれば辛く大変なこともありましたが、この農大での二年間は私の新しい宝物になりました。このことを四月から始まる仕事に活かしていきたいと考えています。

最後になりますが、農大で得た友達、今後も一生大事にしたいと思っています。今度会うときは、農大でのいい思い出を語り合いたいです。

私は幼い頃から動物に興味がありました。小学生の時には、家の近くにある酪農家の教育

ファームの取り組みに参加し、牛の餌やり体験や乳搾り体験などをしていました。

中学生になっても動物が好きで日常的に動物と関われる農業高校畜産科に進みました。

農業高校では入学して直ぐに、科の全員にニワトリの雛が渡されます。それを一年間かけて育て最後には自分で屠畜をし、その命をいただきます。私はこの時に初めて畜産本来の意義である「動物の命をいただき生かされている。」ということを実感し、感謝の気持ちを感じました。それと同時に、畜産という仕事の役割を考えると必要性を強く感じて、将来に私も畜産を仕事にしたい、就農したいと思うようになりました。丁度この頃新聞で「土佐あかうし」についての記事を読み、あかうしの頭数が減少している現状や担い手が少ないことを知りました。「土佐あかうし」とは正式名称を褐毛和種高知系といい、古くから親しまれている高知固有の系統です。そんなおとなしくて愛らしいあかうしに惹かれ、あかうし経営をやってみようと思うようになりました。

しかし、どのように経営をするのかを考えると、多くの問題が浮上してきました。まず私の家は農家ではありません。経営をするとなると当然すべてゼロからのスタートになります。施設もない、技術もない、そんな状態からどうすれば自分が生活していけるだけ



仔牛の授乳

の経営ができるのか。そこで、自分なりに調べた結果、あかうしの繁殖から肥育までを行っている施設で実習をしている農業大学校でなら技術を身に付けることができ、あかうしの経営に必要なことを学べると思いいこの学校に入学しました。

農業大学校ではあかうしの飼育管理はもちろんのこと、飼料作物の栽培や堆肥の切り替えし作業なども行っています。昨年の夏には家畜人工授精師の免許も取得することが出来ました。今年には削蹄師の免許取得にも挑戦したいと思っています。

県内では現在、あかうしの飼育頭数が激減しています。主な原因として就農者が高齢化し飼育戸数が減少していることがあげられます。高知県は人口の三人に一人が高齢者であり、中でも中山間地域の高齢化は著しく、営農し続

けることが困難な農家が年々増えています。飼育頭数が千七百頭ほどの「土佐あかうし」は現在、肉用として肥育された牛が年間四百から五百頭が出荷されています。その知名度は県外でも高く、高知県のブランドとして東京、大阪、京都などの高級料理店でも並ぶほどです。

私は農業大学校を卒業後、五年間で繁殖母牛十頭規模のあか牛の繁殖農家になることを目指しています。あか牛の飼いはこれまで、理論的に理解していたものの実際には飼育したことがなく、一人で飼育するには自信が持てませんでした。しかし、農業大学校で実習をすることで、牛の飼いが実践的にできるようになってきました。また、相談相手になってくれる教官、外部講師の先生や畜産試験場の職員さんとのつながりができたこともあって、今は飼育者としての自信に変わりつつあります。

初期投資に必要な資金がない、家畜を飼う施設がない私ではありますが、諦めずあか牛で新規就農をしたい。また、今後私のような非農家出身の者でもあか牛を飼いたいという若者の先駆者になりたいと思っています。

## 花と私の将来

高知県立農業大学校  
園芸学科一年 花き専攻

祝 婷 婷



私は中国からの留学生です。現在は高知県立農業大学校の園芸学科花き専攻の一年生です。

実家は江蘇省で、自給自足の農業を営んでいます。栽培品目は、稲、小麦のほか、ピーマン、トマト、ニラなどの野菜もあります。私は小さな頃から花が好きで、よく鉢物を買って家で育てたり飾ったりしていました。

私は中国の大学で日本語を勉強していた時に、日本の「生け花」のことを知りました。自然の木や花が持つ美しさが見事に引き出される素晴らしさに感動しました。何とか日本に行き、花の栽培技術や専門知識の勉強をし、花の利用など日本文化を深く理解したいと強く思うようになりました。その思いが叶い、現在農大で花き栽培を学んでいます。

私が取り組んでいるプロジェクトは、オリエンタル系ユリでのヒートポンプの冷房機能を活用した夜冷栽培が切り花品質にどのような影響があるかを調査しています。苦労した点は灌水管理、花蕾へのネットがけなどです。

灌水管理は土壌水分計の数値を見ながら、行なう必要があります。また、ユリの八重咲品種は咲き始めてから収穫するため花蕾にネットを掛けます。大変な作業も多いですが、収穫する喜びや販売する楽しさは貴重な経験となっています。

高知県はオリエンタル系冬春ユリの全国一の産地ですが、日本人好みのライトピンクの花色を持つオランダ産の球根が、以前に比べ減少している事が大きな課題となっています。これは、中国の需要が高まり、相対的に日本の比重が低下したことが原因のようです。品種の問題は日本だけで解決できないことが分かりました。高知県のユリの生産量がさらに減少した場合、オランダからの球根輸入量が世界一となった私の故郷、中国で日本好みのユリを育てて、中国から切り花を輸入できないかと考えています。

現在、ユリの切り花の輸入・輸出はあまり行われていません。しかし、農大で開花液を利用して花の寿命を延ばしたり、普通では咲かない小さな蕾を咲かせることが可能かを研究しています。この技術が確立できれば、ユリの切り花の輸入・輸出も容易となるのではないかと考えています。

高知県の代表的な花には、他にグロリオサ、トルコギキョウ、ブルースターなどがあります。品質の高さとオリジナル性から世界的なコンクールに入賞したり、アメリカなどに定期的に輸出

されています。是非中国の花屋さんでも高知の花が並ぶようになって欲しいです。

私の将来の夢は花の輸入や輸出を行っている会社で、世界中の美しい花を国際的に取り扱う流通の仕事をしたと考えています。その勉強の場として、休日に花屋さんでアルバイトをしています。お客様の好きな花で花束を作ったり、フラワーアレンジをしたり鉢物の灌水管理を行っています。

また、農大では毎年オランダの園芸専門学校と交流を行っています。私もオランダ研修で先進的な生産技術や流通技術を勉強し、さらに、英語、日本語そして中国語を活かして、将来グローバルな大きな夢を咲かせたいと思っています。



オリエンタル系ユリの摘蕾

### 農業大学校で学んだこと

高知県立農業大学校  
園芸学科二年 野菜専攻

#### 大 峯 悠 聖



私は、高知県で生まれ、美味しい野菜を食べることも好きで、中でも私の好きな野菜であるトマトを栽培したいと思い、高知県立農業大学校に入学しました。

学校では栽培の実践を行い、育て方を一から学ぶことが出来ましたが、とりわけ栽培、経営を考えさせられたのは、実際に農家で研修した約五週間の農家留学研修でした。私は農業大学校におけるプロジェクトでもRW栽培のトマトを行っており、栽培の基礎は身につけたつもりでしたが、農家の方の温度管理、肥培管理は想像以上に徹底されていました。また、生長の様子や病害虫の発生にも目配りを欠かさず、「最近このハウスの北側は生長が遅くなっている」、「この屋根の真ん中に病気が発生しそうだから防除をしよう」などの的確に判断していました。栽培規模も広く、そこに管理、観察を行き届かせるためには雇用従業員の力も必要となってきます。経営主の方針を大勢の従業員で理解、実践し、従業員同士の協力体制をつくるた

めに、毎日のミーティングや細かな心配りなど、単に作物の栽培だけにとどまらず多くのことを学ぶことが出来ました。

特に、外国人研修生の方々是非常に仕事も速く、また日本語も堪能でした。言葉も通じない遠い国で仕事をしている彼らのガッツとこれまでの努力を考えると、就職を控える立場として一層身の引き締まる思いでした。

また、年間の作業日誌なども細かく書かれており、この日誌には翌年以降の年間スケジュールを決める大切なものだとおっしゃっていました。私は細かい記録が苦手なのですが、日々の日誌を書くことが今後大いに役立つことを知り、翌日から毎日の日記を習慣としています。

研修が始まる前は五週間という期間がとても長く感じられましたが、トマトの管理作業のほか加温機の設置やハウスの保温準備など様々な作業をしたり、農家や従業員の皆さんと交流したりしているうちにあっという間に過ぎていきました。研修の終盤には同じ農家の研修生を受け入れてくださっている農家の方々と交流の場も設けていただき、さらに親交を深めることができました。

私の実家は非農家で、何も分からなまま農業の世界に入りました。「トマトが好き」、ただそれだけでトマトの栽培方法を勉強しました。しかし、今回の研修は、トマトについて勉強す

るだけでなく私を成長させてくれた貴重な経験だったと思っています。研修を引き受けてくださり、私を大きくしてくれた皆さん、ありがとうございました。

感謝の気持ちで一杯です。農業大学校での生活も、残りわずかとなりました。私は県内農業法人での就職を希望していますが、まだまだ社会で役に立つには足りないところばかりだと実感しています。これからの時間では、特に農業機械の操作や簿記など経営の視点を少しでも身につけられるよう勉強を続け、就職先でも農大で学んだことを十分に発揮して社会に貢献できるような大人になりたいと思います。



トマトの収穫

### よさこい祭りに参加して

高知県立農業大学校  
園芸学科二年 野菜専攻

#### 澤 本 和 馬



よさこい祭りは毎年八月に開催される高知県最大の祭りです。総勢約二〇〇チームが参加します。私は昨年、農業大学校の実行委員長をさせて頂きました。

実行委員としての目標は、二年生には「去年より楽しかった」、一年生には「また来年も踊りたい」、と言ってもらえることだと考えました。しかし、踊りの振り付け、楽曲、地方車(じかたしゃ)、衣装を考え、農大生五十五人をまとめていけるか不安でした。

そこでまず、一、二年生それぞれからリーダーを数人ずつ選出しました。リーダーの話し合いで、今年のテーマを「花」と決め、よさこい祭りで高知県の花をPRしていくことにしました。皆一人ひとり考え方や意見も違い、話をまとめるのが大変でしたが、最終的にはトルコギキョウとアルストロメリアをモチーフとし、その花に合う衣装の色を決めました。

次に、振り付け師さんと一緒に、どんなイメージの振り付けにするかを考えました。今年は扇子を使い、「綺麗

なイメージで花が舞うように踊る」ことを意識して踊りを作りました。しかし鳴子と扇子を交換するだけでも手間取る上に、扇子を取り出すタイミングを揃えなければならず、去年よりもハードルが高くなりました。生半可な練習量では成功しないと考え、五月からリーダー練習を開始しました。リーダーは他の学生に教えられるよう、夜中まで練習し、五日間で全ての踊りを覚えました。

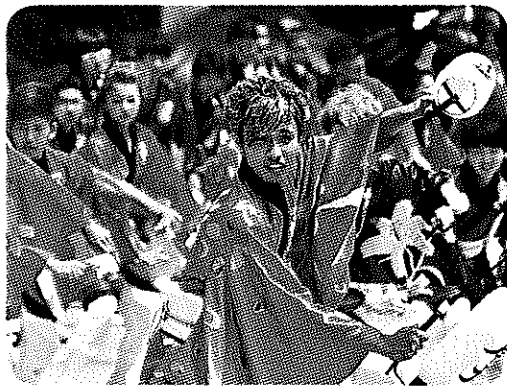
そして、五月中旬から全体練習を開始しました。各列にリーダーを配置し、覚え遅れの人が出ないように心がけました。それでも、頭ではイメージできてても体で表現できない人がいました。去年の教訓からこうしたケースも予想して、練習開始時期を早くしたので、本番までにはなんとか揃えることができました。踊りが完成に近づくと笑顔も多くなり、また本番に向けて皆が団結していく姿に、私も実行委員をやってよかったと思いました。

よさこい祭り本番は、踊る回数が増すに連れ、笑顔の学生が増えてきました。生き生きと踊る姿を見てとても感動しました。猛暑の中で踊り続けるので体調を崩す学生もいましたが、最後の踊りのあと一年生から「来年もやりたい」、「来年こんなのでいいですか?」、「来年俺がリーダーする」という声が聞こえてきました。また二年生からは、「去年よりはるかに楽しかった」など嬉しい感想が聞け、私にとって最高の

よさこい祭りになりました。

約六十人のリーダーとして物事を進めるといふ機会は滅多になく、今回特に協調性の大切さを学びました。例えば、踊る直前になっても振付が揃わないなど人をまとめる力が私には足りないのかと感じた事もありましたが、まず皆の意見を聞き、それを踏まえて自分の意見を述べることを心がけました。また、私一人だけが頑張るのではなく、地方車を作ったり、救護を担当したりと、全員が役割を果たすことで物事がスムーズに進んでいくことを学びました。この事を四月から始まる社会人生活において活かしたいと思っています。

最後になりますが、よさこい祭りに参加するにあたって、ご支援ご指導してくださった皆様、本当にありがとうございました。



よさこい本番

## オランダ研修を振り返って

高知県立農業大学校

園芸学科二年 野菜専攻

土居 英 雅



本校の学生五人は十二月三日から十六日まで約二週間、オランダ・ウエストラント市のレントイス校で研修をさせていただきました。私は海外に行くことが初めてで、不安と期待で胸がいっぱいでした。

レントイス校では、生徒のみんなと一緒に授業をして農業機械などをグループに分かれて紹介をしたり、オランダと日本の有名な野菜をお互いに出し合ってコミュニケーションをとりました。日本でなじみの薄いオランダの野菜としてはピーツやラディッシュなど、逆にミヨウガ等はオランダでは知られていない様子でした。授業にもオランダの生徒と一緒に参加しましたが、とても賑やかでみんなフレンドリーな印象を強く受けました。

オランダではビヨンドなどの先進的な農業生産企業を見学しました。ビヨンドはキクを生産している企業です。オランダの生産者の多くは農業開発メーカーとタイアップして生産の試験を行っています。ビヨンドでは光の波長について、LEDを用いて赤色光と

青色光の比率の違いと品質の関係について試験していました。赤の光は葉を透過するので、奥の葉まで光が届き光合成が効率的に行われます。逆に青の光は植物体上部の葉しか利用されないため花がコンバクトに仕上がります。短い作期で栽培でき、茎が細くならないように青い光を利用して、とても参考になりました。またトマトハウスでは、ハウス見学に来る人たちが多いため、防除を徹底しており、感染を防ぐために不織布でできた白衣を着て見学させていたいただきました。収穫時には従業員の人々がゴンドラのような機械に乗り移動しながら房採りや摘花をしていました。日本ではハウスも小さく機械に乗って作業するのは珍しいのでとても印象に残りました。

オランダの文化は日本と大きく違い、戸惑う点も多かったです。私が最も大変だったと感じたのは英語を話すことです。オランダの母国語はオランダ語ですが、オランダでは義務教育にあたるベシックススクールで英語を勉強するので、九割の人が英語を話せます。私は英語があまり得意ではないのでオランダの人たちとコミュニケーションをとるのが大変でした。しかし、オランダの人たちはとても親切で英語をあまり話すことができない私に親身になって接してくれました。私は間違いを恐れず、積極的にコミュニケーションを取る気持ちがとても重要だと感じました。





ホームステイ先の人々との思い出

私は二週間レンティス校の学生の家にホームステイさせていただきました。ホストファミリーはとても親切で温かく私たちを歓迎してくれました。ホームステイ先では夕食時にファミリーみんなで夕食を作ってくれた料理を食べながら話をしたり、休みの日にはビーチに連れて行ってもらったり、ロッテルダムの大いデパートにも連れて行ってもらいオランダならではの料理などを見たり食べたりし、とても思いに残るものとなりました。オランダに行つて最も困ったことはやはり言葉の壁ですが、日を重ねることに少しずつ聞き取る力が上がり、ホストファミリーやオランダの生徒ともコミュニケーションがとれるようになりました。とても充実した二週間だったと思います。最後に、私はJAに就職が決まっております。最後に、先進的農業技術と今回の

研修で学んだ知識や経験を就職先で活かしていきたいと思ひます。

### いろいろな学んだ一年間とこれからの希望

香川県立農業大学校

野菜園芸コース 一年

楠 宗朗



私の小学生の頃からの夢は農業経営者になることです。それは、父が農業法人を営んでいる

て、幼い頃から身近に農業があり、慣れ親しんできたからだと思います。小中学生の時は、漠然と将来農業をしたと考えていましたが、自分自身が本気で農業経営を考え始めたのは、高校三年の夏です。部活動も終わり、日常的に父の農作業を手伝ったり、農業について父と話をするうちに、農業という道を選択していました。しかし、普通科高校に通っていた私は、農業を始めるには、知識や経験などが足りないと思ひました。そこで、農業のスキルをつけたい、また、これから農業をする同世代の仲間達や多くの先進的な農家との繋がりを作りたいと思ひ農業大学校に進学しました。農業大学校に入学してからの一年間は、農業の基礎的な技術や知識を学び

ました。実習では、夏はトマトやピーマン、ナス、トウモロコシなどの夏野菜を、冬はレタスやニンニクなどの露地栽培やトマトやキュウリ、イチゴなどの施設栽培の管理を行いました。学校の実習では、栽培する品目の数が多く、たくさんの品目の栽培方法を学ぶことができました。

一方、講義では、栽培指針や土壌分析などの農業の基本的知識から農業経営や農業簿記など様々なことを学ぶことができました。それに加えて、将来必要になる資格もとることができました。現在、玉掛けやフォークリフトなどの資格を取得しています。この調子でこれからも将来必要になりそうな特殊車両や農業簿記などの免許や資格を取れるだけ取りたいと思ひます。

その他にも、学校では、様々な先生方と話したり、農家さんと話す機会や実際に現場で作業をする機会をつくってくれたので自分の考えや目標が明確なものになりました。学校主催の農業実践講話では、県内の農家さんの話を多く聞きましたが、今後は四国や東京の農業経営力養成講座などにも参加して、県外の農家さんの話を聞き、今後の自分の農業経営に活かしたいと思ひます。

また、十月から十二月にかけて週に二日、授業の一環で先進的な農家さんのもとで農家実習をしました。農家実習では、農家さんや従業員の人達がとても親切にしてくれて、作業がしやす

かったです。そして何より実習内容が学校とは比較にならないくらいハードでしたが、充実した十五日間になりました。実際に現場で働いてみて、丁寧なことも大事ですが、スピードも重要だということがよくわかりました。また、農家さんは、従業員や僕達学生が来る前に朝早くからその日の段取りをつけてくれてとてもスムーズに作業することができました。他にも、農家さんと話をしてみても、自分のこれらの事について、意見や助言などをもらうことができるとも参考になりました。実習先の農家さんには農作業だけでなく、実際に自分が就農する時に必要なことを教えてもらい、短期間ではありましたがとても充実した時間を過ごすことができました。

十二月には、四国ブロック意見発表会がありました。私は今回発表者として



農場実習でピーマンの管理作業

て参加しました。自分の意見を伝えることはとても難しいことだと改めてわかりましたし、大勢の人の前で話す良い経験ができました。また、どの代表者の発表も将来の夢が溢れる良い意見でとても参考になりました。同世代の将来の農業者として目標に向かって頑張ってほしいです。今後このような発表する機会があるなら是非発表者として参加したいと思います。

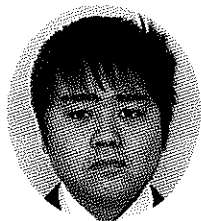
去年は、新たな気付きや発見、出会いがあり、いろいろな経験させてもらい、とても充実した一年間を過ごすことができました。今年は、もっと自分からアクティブに色々なことに挑戦し、今の自分になりたいと思います。

### 農業の道へ進むにあたって

香川県立農業大学校

花き園芸コース 一年

#### 大林 尚 矢



私の実家は輪ギクを栽培していましたが、私は深く関わろうとせずに、普通科の高校に通って勉強の方に目を向けてきました。その理由は父が忙しくて大変そうだったからです。毎日忙しく働いて、帰宅する時間が遅い時もよくあり、疲れから腰などの不調を訴える時もありました。それを見ていた私は、いつからか

「農業は自分には向かない、あまり就きたくない仕事」だと、思っていました。しかし、その気持ちは高校三年の時に変わりました。それは、進路について考えた時で、最初は、一番自分に合っている一般の大学に行こうと思っていました。自分が、自分の中に技術を身につけたいという気持ちが湧いてきました。勉強の方が目をつけてきた私ですが、何か技術を身につけて、それを今後の人生に生かすことが魅力に感じたのだと思います。身近にあったそのような環境が農業でした。自分の中であまり良いイメージでなかったものが頭に浮かんできたのです。それは、身近にあったからこそ、技術のいる職業だと感じられたのだと思います。これらが理由で、私は農業の道へ進み家業を継ぐことを決めました。その第一歩として香川県立農業大学校に入学することにしました。

「農業は自分には向かない、あまり就きたくない仕事」だと、思っていました。しかし、その気持ちは高校三年の時に変わりました。それは、進路について考えた時で、最初は、一番自分に合っている一般の大学に行こうと思っていました。自分が、自分の中に技術を身につけたいという気持ちが湧いてきました。勉強の方が目をつけてきた私ですが、何か技術を身につけて、それを今後の人生に生かすことが魅力に感じたのだと思います。身近にあったそのような環境が農業でした。自分の中であまり良いイメージでなかったものが頭に浮かんできたのです。それは、身近にあったからこそ、技術のいる職業だと感じられたのだと思います。これらが理由で、私は農業の道へ進み家業を継ぐことを決めました。その第一歩として香川県立農業大学校に入学することにしました。

大学校では、授業や実習が始まった当初は、授業に出てくる専門用語の意味や、実習で行う定植、摘芯、切り戻し等の作業に馴れず、苦戦しました。特に実習は初めてのことが多く、作業が遅れていました。ですが、先生方の指導やアドバイスのおかげで、多少ながらも作業も速くなったと思います。授業とは別に、四国地区の農業経営力養成講座に参加する機会がありました。そこでは、実際に農家の話を聞き、普段の授業では学べない経営の大切さ

を知ることができました。また、各県の農大生が集まる交流の場でもあったので、新たな人脈や見識を広げる自分にとってよい機会となりました。十月から十二月にかけて十五日間、花き農家への実習に行きました。その農家は、コチョウランを主体に栽培されており、その栽培管理や出荷作業をさせてもらいました。水やりや施肥などの基本的な作業から、出荷の準備やトラックへの積み込みなど普段体験できないことをやらせてもらい勉強になりました。印象に残っていることはコチョウランを自身の店舗で直売していることで、進んだ経営をされているなあと感じました。この農家実習は、私にとっていい経験となりました。



農家実習にて

発展しないという気持ちも生まれましたが。実家は輪ギクをJ-Aに出荷していますが、他の農家は規模拡大をしたり、多様な品種構成に変えて経営改善に取り組んでいます。今後はいろいろな情勢変化に対応できるように、農大での研鑽を積んでいきたいと思っています。

### 私の農業への想い！ 農大での学び！

香川県立農業大学校

果樹園芸コース 一年

#### 土居 紀 子



私が農業に関心を持ったきっかけは、一つ目は、家の周囲に農家が多かったことです。施設イチゴや米麦、キャベツや葉たばこを育てている農家などがある農村環境の中で育ちました。

二つ目は、父が農業大学校出身ということです。父と会話する度に体験を聞かされ、よく「農業はいいぞ」。農業は「という言葉を口にしていたので、農業を学べる学校に行きたい気持ちが膨らんでいきました。

そして、父が農業大学校で、農業を一から学んだように。農業を勉強したいという思いを叶えるために農業高校から農大へ進学しました。高校時代か



ら「小原紅早生」の肥培管理などの課題研究を進めていましたが、農大では果樹園の品目や品種の多さに驚きました。品種ごとの味や大きさ、糖度などの比較ができます。ブドウも多品種あるので、食味比べをすることができました。

機械を使った作業をすることもできます。運搬車や農耕車、草刈り機を使った作業を初めて経験しました。他にも使った事のない機械があるのでこれらの授業が楽しみです。二年生ではトラクターなどの大型特殊機械の運転免許試験にもチャレンジしたいです。

「農家実習」では、実際に優良農家で研修ができました。ほ場が広くミカン樹の本数も多く収穫量も桁違いでした。ほ場が広いのでトラックで移動や運搬を行っていました。実際の農家のスケールの違いを目の当たりにしました。

また、周りの農家の方と協力して、病害虫・鳥獣害の対策を考え、草を刈ったり、鳥獣の糞を仕掛けたりと地域で助け合っています。

ミカンは簡単に育つわけではなく、人が手間暇をかけて育てないと消費者に喜んで食べてもらえるようなミカンは作れないことを改めて思い知りました。



農家実習でミカンの収穫作業

日本人は相手のことを考えて物を作っていると父が言っていました。父は海外で仕事をすることが多く、帰国すると「日本の食べ物には安心して食べられて美味しい。」と言っています。海外では現地の水がきれいではない地域があり、その水で育てた野菜や果物を食べるとお腹をこわすことがあると言っていました。そのせいで父や同僚の方全員が体調をくずしたことも何度かあり、日本の農産物は安全でも品質が高いので、海外では人気があると父は言います。

その話を聞いて、日本に生まれて本当に良かったと思うし、美味しいものに囲まれて幸せだと思うようになりました。日本の物を海外に輸出して日本の良さをもちと沢山のの人に知ってもらいたいと思いました。

私は、人と接することが大好きなので、それに適ったアルバイトをしています。メイドカフェのメイドです。

アルバイト中は話すことが苦手な方が来た場合にもすぐに打ち解けることは難しいですが、その人が持っている物を見て、好きそうな話題を考えないといけません。この方法は、相手に「自分に興味を持ってもらいたい」、「印象に残る機会にしたい」と思う時に役立つと思います。

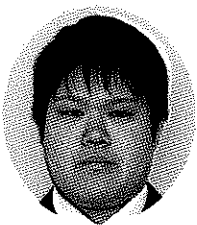
自分の得意なことと自分がしたいことを上手く組み合わせると、社会に出た時に、有利になるのではないかと思っています。

私は、将来J/Aなどに就職して、果樹について教えられる人間になりたいと思っています。そのためにも、農大で学んだことと、メイドカフェで培った会話のスキルの両方を使って多くの人に「農業」の魅力を伝えたいと思います。

### 農大に入学して

香川県立農業大学校  
造園緑化コース 一年

東口 泰世



私が香川県立農業大学校の造園緑化コースに入学しようと思ったきっかけは、農業高校の

園芸科造園コースで造園を学び、造園の難しさや大変さ、そしてその楽しさ

を知ったことです。

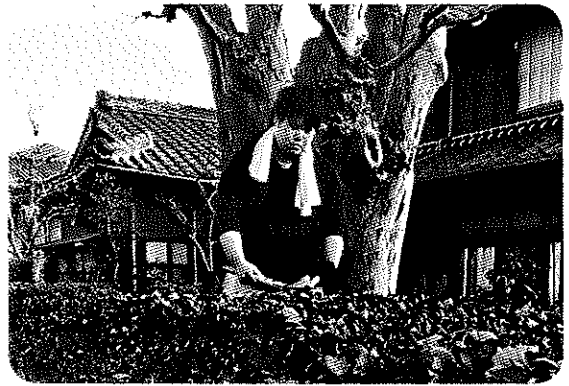
高校二年生までの私は、どうしても造園関係の仕事に就きたいというほどの強い決意はありませんでした。しかし、高校三年生で三級造園技能検定を受けることになり、もしこのまま造園会社に就職することになったとしたら、仕事をしながらこの検定の二級や一級に合格できるかどうかとても不安になりました。

その時、先生などに進路について相談し農大を知りました。農大のことを調べていると、造園に必要なクレーンや玉掛けの資格が取得できること、インターンシップの制度があることなどを知り、オープンキャンパスで実際に農大の先生と話しをして進学することを決めました。

農大に入学してからは、樹木の特性やその名前、剪定、刈込み、道具、機械の使い方、石材、生垣など説明しきれないほどたくさんを学んでいます。

また、実習では、入学してすぐにサングジュとカイズカイブキの生垣の刈込をしました。そして、夏休み明けにはクスノキやトチノキなど高木の剪定をしました。この時は、木に登ったり高い脚立を使ったりするのでヘルメットと安全ベルトをして作業をしました。雨で幹がほんの少しだけ滑りやすかった時には、特に細心の注意を払い剪定を行いました。

最近では、樹木のなかでも剪定が難



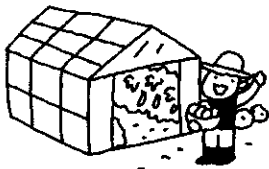
農家実習で生垣剪定

しい松の剪定も行いました。松は葉のない古い枝のところなどで切りすぎると新芽が発生せず見栄えが悪くなり取り返しつかないことになりす。しかし、逆に少ししか切らないと綺麗にはなりません。「来年にはこっちに伸びてほしいからこう切ろう」と来年のことを考えながら切らなければなりません。

来年のことを考えて剪定しなければならぬのは松だけに限らずほかにもたくさんあります。花の咲く樹木は季節を考えて切らなければならぬし、時には再来年もつと先のことまで考えて剪定や刈込をしています。これは造園に限ったことではありませんが、知識や技術など様々なことを習得することが必要だと身をもって知ることができています。

この学校で体験したもう一つのこと、実際の会社に行き実習をする農家実習です。私は、造園会社でお世話になり、お客様の庭の手入れを行いました。簡単な刈込をやらせていただき、鋏の持ち方や向き、動かし方まで丁寧に教えていただきました。プロの庭師たちの鋏の速さや綺麗さは今までに見たものとは比べ物にならないくらいすごいものでした。私もいつかこんな風に見えるようになりたいと思いました。それまでは気にしていませんでしたが、今では少しでも鋏が早く動くよう、綺麗に切れるように努力しています。なかなかうまくいきませんがあきらめずにできるようにするまでこのことは意識していきたいと思っています。

最後に、私は二年生になったら卒業論文で庭を作庭したいと思っています。設計図から作成し、自分が満足いく庭が完成できるように頑張りたいと思います。そして、社会に出てからも常に勉強し、高校・大学で学んだ事を活かしていきたいと思っています。



### 農大で学んだこと

香川県立農業大学校  
畜産コース 一年

村上 絵美



私が、香川県立農業大学校の畜産コースに入学してから一年がたとうとしています。私が農

業大学校に入学しようと思ったのは、農業高校で畜産について学び興味があり、さらに多くの知識を得たいと思ったからです。

高校の先生から、農業大学校では高校で学んだことに加え、牧場や養豚場や畜産試験場での実習があり、家畜人工授精師や農業簿記、農業技術検定など専門的な資格が取得できると聞き、入学を決めました。

高校では、養牛部門を専攻し肉用牛の肥育を主に行っていたので、豚と鶏については知識を得る機会はほとんどありませんでしたが、農業大学校に入學してからは、家畜生理・解剖や家畜飼養など基礎的な授業から、肉用牛や乳用牛など家畜別の授業も行なわれました。また、農業経営や農業簿記など畜産以外の農業のこと、英語や体育、コミュニケーション演習など農業以外のことも学んでいます。

昨年十月から十二月にかけて十五日

間酪農家で農家実習を行いました。朝早くから搾乳作業や子牛のミルクやり、エサの配合などで、農家の大変さや厳しさを学ぶことができました。特に大変と思ったことは、朝六時からの搾乳でした。牛の搾乳室への追い込みと搾乳を毎日同じ時間にこなす酪農家の偉大さを感じました。

長い時間牛について牛の習性を知ることができました。例えば、子牛が哺乳瓶からミルクを飲むとき頭を突くような仕草をするのは、母牛の乳房を刺激して乳の出を良くさせる本能的な行動だそうです。いろいろ丁寧な教えていただき、良い経験になりました。

農業大学校の学生生活もあと一年となり、畜産試験場での実習が主となります。私は、牛を選択しようと思っています。また七月から八月には、家畜人工授精師の講習を受けて、その資格



牛のエサやり

を取得する予定です。  
最後に、最終目標である自分の望む牛関係の職業に就けるように残された学生生活を精一杯に頑張っていきたいと思えます。

### 自治会活動の思い出

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校

学生自治会長

生産技術コース 二年

### 入 口 恵 輔



徳島県農業大  
学校は毎年六月  
に自治会総会を  
開きます。一年  
次の総会の前  
に当時会長か

ら「副会長になってくれないか？」と誘われました。中学、高校時代に生徒会に所属してなかった私にはとても難しい事を頼まれている気がして簡単に「副会長になります。」とは言えませんでした。しかし、戸惑いながらも心の中では誘ってくれた事がとても嬉しく、引き受けました。

自治会活動は、初めての事ばかりでしたが、四国農学連スポーツ大会、農大祭の事を会長などと相談しながら務めました。先輩方や同級生の役員は本当に優秀で、困った事があっても助け合い、農大祭などを成功させました。一年次生のときは、先輩方が引っ張っ

ていってくれたので、特に苦労はせず、学校生活を送れました。十一月の農大祭が終われば、それ以降は、一年次生が、自治会活動を行う事になっていきます。私が次の会長が決まるまでのリーダーとして頑張らなければなりません。私自身、集団活動などは本当に苦手なタイプではなく、裏方でサポートする方が向いていると思っていました。

十二月に収穫祭という、一年次生が農大で収穫した野菜や果物を使い二年次生に料理を振る舞う行事があります。その内容を話し合うため、一年次生だけの役員会を開きましたが、今思うと、私の仕切りは駄目でした。水炊き、炊き込みご飯を作ったのですが、準備もスムーズに行えず、あまり上手に作れませんでした。その上、人前で話すのが苦手な私はあいさつも上手にできませんでした。それでも二年次生、先生方は美味しいと食べてくれたのは本当に嬉しかったです。しかし、自分ではあまり副会長にむいてないと思っていました。

そんな時に四国農学連意見発表会の全体の司会、進行を任せられました。戸惑いながらも司会進行でき、我ながら上手に運営できたかなと自信が付きました。それから何事にもチャレンジする事、失敗を恐れない事、自分一人で頑張るのではなく、みんなと協力しあい助け合う事が大切だと実感し、二年次では会長になりたい思いを役員に伝

えました。

二年次生になった六月、自治会総会で会長になり、新しく入学してきた一年次生を自治会役員に迎え、新メンバーでスタートを切りました。定期的な新入生歓迎会の事や、農大祭の事について議論をしました。しかも今年の農大祭は、記念すべき第五十回目の農大祭です。いつもと違う記憶に残るような農大祭にしたいと、ピング大会、キッズダンス、みかんジャムの試食会、学生が将来の目標を叫ぶ企画などを提案しました。また徳島県農業大学校では、学生全員で模擬会社「徳島農大そらそうじゃ」を経営しており、農産物の販売などは「そらそうじゃ」が行なっています。農大祭でも、「そらそうじゃ」と並行して準備を行うため、自治会役員だけでなく、「そらそうじゃ」役員側の意見もたくさん出たので、よりよ



農大祭の準備

い方向に農大祭の準備ができました。本当に全員一丸となって頑張れました。今までで一番忙しい時間が続いた大変な事もありましたが、農大祭の企画開始から終わるまでの時間を振り返ると、一生の思い出になるくらい充実していました。そのため、一年次生に自治会活動を引き継いだ後は、寂しく感じました。

農業大学校に入学し、農業の基礎だけでなく、みんなと協力して何かを成し遂げる事、生きていく上で一生の財産になる思い出を手に入れたと思います。本当に大切な事を学びました。会長職をやって本当によかったです。

### 農業と模擬会社

### 「徳島農大そらそうじゃ」の運営を勉強して

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校  
生産技術コース 二年

### 國 安 卓 磨



私が農業大学校に入学を希望した理由は、高校で専攻していた果樹の勉強をもっとしたいと

思ったからです。高校では梅、梨、栗、ブルーベリー、などの栽培作業や果実を使った加工品づくりに携わっていました。



シャインマスカットの摘粒作業

入学当初は、農業の基本的なことを教わり、実習では自分のプロジェクト課題を考えながら、先輩方三名のミカン、梨、ブドウ(ビオーネ)のプロジェクトを手伝いました。

私は、プロジェクト研究として「シャインマスカットの省力化」について取り組みました。夏休みには週に三日か四日くらい学校に出てきていました。シャインマスカットの栽培作業をしているうちにブドウの栽培が楽しくなってきました。卒業後は、家庭菜園になります。マスカットの栽培をしたいと考えています。また、徳島農大は研究機関と同じ施設内にあるため、研究員の方にも質問をすることができ、より幅広い専門的なことが勉強できて楽しいです。

また、農大に入学して大型特殊免許

(農耕用)、フォークリフトなどの資格も取得しました。

徳島農大では、模擬会社「徳島農大そらそうじゃ」を運営しています。学生全員が社員です。主な業務内容は学生たちが栽培した農産物の販売やその加工です。学校で販売する他、県内や県外にも出張販売に行っています。「そらそうじゃ」には四つの部署があります。企画開発課、農場管理課、営業課、販売課です。企画開発課は、販売時のイベントや農産物の加工品などを企画しています。農場管理課は、GAPの考え方に基づいて、農業事故や異物混入の防止や、効率的な作業を目指し、作業舎の使用法の改善を行っています。営業課は、売り場の整理やフェイスブックなどのSNSの情報更新を中心に販売促進方を検討し、実施しています。経理課は、販売活動の時に農産物のバーコードやプライスカードの用意をしています。

私は、第七代目社長をさせていただきました。最初は私に社長が務まるか心配でしたが副社長や社員みんなの助けもあり、役職を務めることができました。社長職を経験することで、人をまとめる事や社員と話し合いをするなどの難しさや大切さを学びました。

各部署で月一回課内会議を開き、新企画や問題点を話し合っています。最初は何を話し合っているのか分からないため、うまく司会ができず、話し合いが進まないこともありました。

しかし、回数を重ねるごとに、だんだんとよい意見が出てくるようになりました。今では、売り場の改善やのぼり、販促グッズの制作など、どんどん実現しています。

農大祭では、学生自治会から「そらそうじゃ」に農畜産物の販売、収穫体験業務が委託され、自治会長と契約書を交わしました。農畜産物の販売をはじめ、ミカン狩りや子供向けのサツマイモ掘り体験、キクの摘み取り体験など、たくさんのお客さんに来ていただきました。

私は、卒業後、鶏肉加工会社に就職します。「そらそうじゃ」で身につけたリーダーシップの力や学んだ団結力の大切さを活かしていきたいと思っています。

## 学校生活と農業に対する思い

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校

生産技術コース 二年

繁 崎 優 希



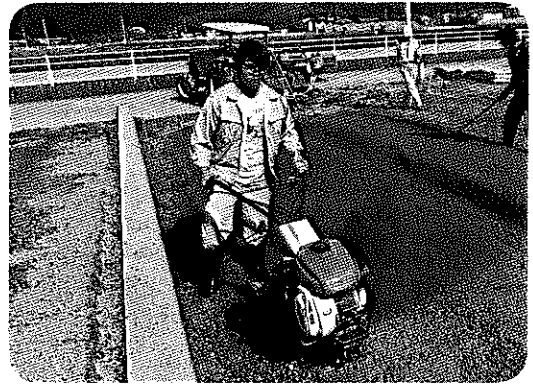
私は徳島農業大学校に通う前は、農業高校に通っていました。母方の祖父

家で、そんなこともあってか少しだけ農業に興味を持ち農業高校に入学しま

した。高校では主に、草花の露地、ハウス栽培管理と販売、バイオテクに携わっていました。二年の夏ぐらいまではなんとなく通っていましたが、農業大学のオープンキャンパスがあるというので参加しました。色々な設備や栽培されていた野菜などを見て、農業にさらに興味を持ち、農業大学校に入学しました。

徳島農大では、入学してからコース別に別れるのですが、私は野菜の生産に興味があったので生産技術コースに所属しました。生産技術コースに所属してからは、先輩のプロジェクト研究の手伝いをしながら、大根、ナス、ニンジン、サツマイモ、ネギなどの栽培管理や出荷準備などを主に行いました。夏場の暑い時期のナスの収穫や管理などはすごく大変ながらも、やりがいを感じ、友達や先輩方と楽しくやっていたのをよく覚えていてます。高校や祖父母の家で農作業をしていた時は怠いとか、疲れたという楽しくない感情だけでしたが、農大で外に出て実習をして様々な体験を重ねていくにつれて、そんな感情は薄れていきました。

教室で行う講義は正直なところ、教わったことをすべて覚えていくわけではないし、むしろ忘れていくことが多いと思います。しかし、学校で学んだことは将来、農業関連会社に就職したときや就農したときに、絶対に必要な知識も数多くあり、ノートに必死になつてメモを取ったことは、役に立



実習での畦立て作業

つと思うのですごく良かったです。

実習では、農家体験学習というものもあります。これは、農大の学生が農家さんの所で農作業を体験するということです。私が伺った農家さんは法人化しており、色々な野菜を栽培して、契約販売で業者に出荷することで会社を経営しています。契約販売ということで、雨の日でも契約で決められた品数を出荷しなければならぬので、私が体験した二十日間は短い間でしたが、過酷でまた貴重な体験となりました。

私がプロジェクト研究に選んだ作物は、「ホウレンソウ」です。最初は明確な課題がなく、何を栽培して何を研究したいという思いはありませんでしたが、祖父母の家でホウレンソウを栽培していましたので、何か活用できることがないかと思い、決めました。農

大と祖父母の畑の土壌は、どちらも粘土質です。ホウレンソウは粘土質の土壌での栽培にはあまり向いていません。そこで粉殻と粉殻燻炭を土壌に施用して土壌の物理性を改善し、高品質なホウレンソウ栽培を行うという課題に取り組みました。調査はまだ継続中で、今までの結果では粉殻燻炭を施用した区と何も施用していない区では、ホウレンソウの生育や発芽率に大きな差があり、粉殻燻炭を施用した方が良いという結果を得ることができました。

私は農大に入学して、様々な体験をしてきました。その中で農業に対する思いと考え方が大きく変わり、栽培や販売を通じて様々な出会いがあり、農作業をこなしていく度に新たな達成感があり楽しかったです。農業にはまだまだ多くの未来があると確信しています。

### 農大生活と将来の夢

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校

生産技術コース 二年

松田 敬大



私の家は、祖父母がすだちと温州みかんを作っている兼業農家で、食に関する職に興味がある。

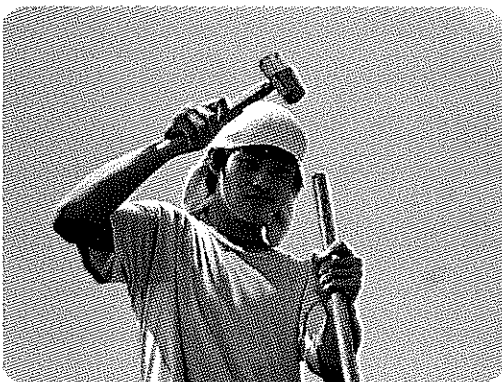
あり、就農して家の農業を継ぎたいと思つたため、農業に関する知識と技術を深く学ぶことができ、資格取得も狙える徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校に入学しました。

農大に入学してからは、様々な行事がありました。五月には剣山登山があり、剣山の麓から頂上まで徒歩で登っていきました。登山は体力が要り、辛かったです。山頂は見晴らしが良く、達成感を得ることが出来ました。頂上で一泊して、夜はクラスメイトとトランプで盛り上がり、早朝には御来光を皆で拝みました。二日目は次郎峯まで行き、下山も疲れました。十月には、四国農学連スポーツ大会がありました。愛媛農大が段違いに強かったです。十一月は農大祭があり、みかん狩りには数多くの人が押し寄せました。

私は、プロジェクト課題で、すだちの試験をしています。すだちは、ハウス栽培や貯蔵技術により周年出荷され、全国で九十八%の生産量を誇る、徳島県を代表する特産物です。すだちは、黄化するると酸と香りが落ちるため、緑色なものほど高品質とされています。すだちに植物成長調整剤のジベレリンを散布すると、果皮の緑色を保持する効果があるため、この緑色保持を課題にしました。まず、比較するためにジベレリンを散布しない無処理区と、ジベレリンを散布した区を比較、ジベレリンの効果の助長を検討するため、アブローチBI(展着剤)と混用

した区と、ジャスモメート液剤を混用した区を設け、油膜で蒸散を抑制することでの助長効果を期待して、ハーベストオイルを混用して散布する区、それとジベレリンを散布せずに硫酸アンモニウムと尿素(水に溶いて液肥とし、葉面散布)の葉面散布用肥料を多めに施し、緑色が濃くなるかを見る区、六区を設けました。調査した結果、今回は、ジベレリンを低濃度で散布したためか、結果にそれほど大きな差が出ず、樹の個体差と言わざるを得ない結果になってしまいました。

農業大学校卒業後は、JA臨時職員として、二年ほど農業の技術を磨く予定です。JAではトマトやキャベツの生産に携わることとなっています。その後は、温州みかんとすだちを中心に、果樹農家として生計を立てていくつもりです。温州みかんは、祖父母が



防鳥ネットの支柱打ち

栽培しているビニールハウスが五反ほどと、すだちは、露地で五反ほどあります。他の果樹として、モモやリンゴ、ナシなども作ってみたいですね。販売経路は、始めのうちは農協や産直市で販売していき、軌道に乗ってきたら、ホームページを立ち上げて、インターネット販売に取り組み予定です。また、加工施設を建てて、オリジナルのジャムなどを作り販売する、六次産業化にも手を付けたいです。これらを実現するのは、とても厳しい道のりとなりますが、農大で身につけた知識や技術を生かしながら、実現に向けて努力していきたいです。

『Taking it one step at a time  
一歩ずつ前へ』

愛媛県立農業大学校  
総合農学科一年 花きコース

越 智 葵



農業大学校を卒業後、私はアメリカに行きます。なぜなら国際農業交流協会が主催する海外

農業研修に参加するためです。なぜ私とその研修へ参加したいのか。それは「さくらひめ」との出会いがきっかけでした。

農業高校時代の私は、フラワーデザ

インを専攻し、タマシダ、アスパラガス等のグリーン類や、バラ、カーネーションのハウス栽培の基本技術の習得と、フラワー装飾技能検定の取得やブライダルブーケ、花束の作成を主に勉強していました。三年生の十一月ごろ、ハウスの一角に、今までにない新しい品種の花が植えられました。それが、さくらひめです。

「さくらひめ」は、愛媛県農林水産研究所が開発したデルフィニウムのオリジナル品種で、日本フラワー&ガーデンショーの人気投票でグランプリを受賞したシネンシス系のピンク色を映かす極めて稀少な花です。

初めて見る満開のさくらひめのあまりの美しさに胸を打たれたのです。淡い桃色で優しく透けるような花弁、可愛らしく清らかで優しげで、柔らかな春を思わせるようでした。また、本物の桜にも全く劣らない繊細な美しさがそこにもありました。

さくらひめは、キャスケードにもシャワーにもオーバルのどのブライダルブーケの形にも使いやすい花材であること、感情や情景の表現もしやすいことを実際に使用して感じました。きつとフロリストにも一般の方々にも多くの人に気に入って貰えるはず、この花をより多くの人に知ってもらい、さまざまな場所で使って欲しい。そんな思いを持つようになりました。その思いを叶える一歩として選んだ道が農業大学校です。私は現在さくら

ひめの栽培に関わっています。そして主体的に管理するうちに、さくらひめを、また、日本の魅力ある花を、私は全国に留まらず世界へ、海外へ、発信したいと思うようになりました。日本の花を海外へ売りたい、そのためには、どんな道を進めば良いのか、何をすべきなのか悩みました。そんな時、とあるサイトで海外農業研修のことを知ります。海外で農業を学べる！それは私にとって将来へのヒントを見つけられる大きなチャンスに思えました。その時私は海外農業研修に行くことを決意したのでした。

「アメリカへ行き何を学びたいのですか。」入学当初、校内で意見発表をした時の私はその質問に答えられませんでした。ただ、海外研修へ行きたい、何かヒントが見つかるはずだから、そう考えていただけだったからです。その時から約一年が経ちました。今なら、あのときの質問にはつきりと答えられます。「私は、アメリカでの花の保存方法、販売、流通、市場の現状、コスト削減の手法、生産とサービスのバランス、違う視点からみる日本の農業、海外の方が求める日本の花とはどんなものか、またどのように売るとよいのか、これらのことを学びたい」と考えています。アメリカの農業技術や経営を日本でそのまま生かせることは多くはないと思います。しかし違いから見えるものやそこから活用できるものと、アメリカだからこそ知り得るもの



花きコースのみんなと

はきつと多いはずですよ。私が将来海外へ花を売るとき、強みにするのは日本人の持つクオリティの高さです。よりよいものを求め向上しようとする姿勢です。これを海外研修でも忘れることなくアメリカでの一年半をより充実したものに行きたいと思えます。

私が海外農業研修に向けてすべきことは英語と花の勉強です。この意見発表を作成するにあたって、もう一度将来のことを見つめ直すことができ、英語を身につけようという気持ちを確かなものにするのができました。花では卒業論文としてさくらひめの管理・栽培をすること。先進農家研修で花農家の経営実態を学ぶこと。以上をこれからの目標とし勉学に励みます。

来年の四月には海外農業研修の応募



受付が始まり、プレエントリーをします。残り一年の学生生活、海外研修に向けて着実に進んでいきます。そして再来年の三月、私はアメリカへ研修に行き、帰国後は必ずさくらひめと日本の花を全国へ、海外へ発信する夢を叶えます。

### 「私だからこそできる」 を目指して

愛媛県立農業大学校  
総合農学科一年 農産園芸コース

尾 中 美 穂



私が農業大学校に入学したのは将来就農し、女性が主となる農業生産法人を作ろうと思ったからです。

とはいえ、私の家は農家ではありません。両親はごくごく普通のサラリーマンで家に農地はありません。非農家出身の私が農業を志し法人を設立しようと思っただけには二つのきっかけがあります。

まず農業に興味を持ったのは小学四年生の時です。自由研究として家の庭でトマトを種から栽培したことで野菜栽培に目覚めました。苦勞して栽培したトマトを食べた家族の笑顔は今でも鮮明に覚えています。そのときは農業

を趣味として楽しむだけでした。それが将来の夢となったのは高校生になってからです。

高校に進学した私は放送部に所属したことで将来を左右する出会いを迎えます。

放送部には、ドキュメント番組を制作してその作品を審査し評価する競技大会があります。その番組を制作するにあたって高校からほど近い、愛媛県内では極めて珍しいハウス面積一畝を有する大規模観光イチゴ農園の取材をすることになりました。

その農家のイチゴ栽培に対する熱意やお客さんの笑顔のために努力を惜しまないことを熱く語る姿に、夢中で野菜栽培をした幼かった頃の自分を重ね、その姿にすっかり魅了されました。そこで、私はこの取材を通して知った農業大学校に進学し野菜栽培について学び、将来は就農し私の大好きなトマトを栽培したいと強く決意しました。

私は、農業の専門的知識をほとんど持たないまま農業大学校に入学しました。入学当初は先生や友達との専門用語を使った話が何を言っているのかさっぱりわかりませんでした。そんな私に農業のことを教えてくれたのは他でもない女性の仲間でした。

農業大学校にも男性に負けないくらい農業の知識が豊富でそれを授業に生かし、今後農業に生かそうとしている仲間がいます。

近年、男女に関する一般的な考えが

変化してきています。二十一世紀に入り、男女参画社会基本法が制定されたことにより、第二次、第三次産業を主として男女が平等に様々な活動が行えるようになったことが要因だと思っています。

男女参画社会とは男女が平等に自らの意思で社会の活動に加わり、共に責任を負うべき社会のことを指します。しかしこの法が制定された後でも、第一次産業に就こうと考える女性は少ない傾向があります。女性が「責任を持つて農業に従事できる環境がなく、決断できない状況下」におかれている原因も大きいと考えます。

それならば、新しい農業の形として女性が主体の農業団体を作っても良いのではないのでしょうか。近年では、農業も機械化やデジタル化が進み、女性が農業参入できる可能性が非常に高くなりました。

農業は女性にとって最高の職業だと考えます。産休や育休に入ってから後職場に復帰しやすい職場です。計画的な農作業で休みも定期的に取得できます。お母さんとなった後も子供に何かあったときすぐに駆けつけることもできます。これは他産業では難しいことです。

急病時に「すぐに来られなくてごめんね。」とパートで一生懸命働く私の母の姿……。子供に何かあったとき、一番に駆けつけられる存在でありたい。それは母親全員が感じていること

ではないでしょうか。

農業なら、農業こそ母親たちの思いが叶えられる職業ではないでしょうか。少しでもその思いを叶えてやりたい。だからこそ私は、女性が主となる農業法人を作りたいと思いました。

私は卒業後、土地30aを借り、露地野菜を含めたトマト施設栽培からスタートします。販売は、産直など、消費者直接販売を重視した形態を図ります。栽培確立に三年、販売確立に二年、そして五年後規模拡大し、十年後に六次産業を含めた農業生産法人の設立を醸成します。

私だからできる農業団体、この夢を大きく女性CEOになるため、まずは農業大学校での実習や授業を通して農業の基礎を学び、数多くの愛媛農産物の宝物と出会った仲間との絆を強く



トラクタの運転に挑戦！

し、ネットワークの形成に努めます。「非農家出身の私だからこそできた」と言われるよう、しっかりと目標に向かって更なる勉学に励みます。

### 学友とともに農業で生きる

愛媛県立農業大学校  
総合農学科一年 果樹コース

矢野 晃 一



私の家は、八幡浜市の真穴地区で柑橘栽培を営む専業農家だ。作付面積は4haで、その大

半を温州ミカンが占めている。私は幼い頃から父とともに果樹園で、多くの自然に触れてきた。中学、高校と柑橘栽培の経験を重ねていくうちに、農業への興味や関心が高まり農業を一生の仕事にしたいと思うようになった。

私の住む真穴地区は宇和海に面した温暖な地域で柑橘栽培の適地ともいわれている。過去には、天皇杯を受賞するなど愛媛のみならず、全国でも名の通ったブランド「真穴みかん」がある。近年では、他の産地同様に様々な問題が起こりつつある。

まず一つが人手不足だ。特に収穫時における臨時雇用の確保である。地元だけでは十分な雇用を確保することができず、適期収穫ができない現状があ

る。そこで収穫が忙しくなる十一月頃から、真穴地区では真穴地区独自で収穫のアルバイトを全国各地から募っているが、人数が限られており慢性的な労働不足が起きている。

二つ目は異常気象対策である。今シーズンは夏の干ばつによる水分不足で、葉が振るってしまい着色不良や、小玉果が多く発生した。昨シーズンは高温多雨な天候が続いたため浮皮果が大発生し多くの果実が腐敗してしまい大きな影響を受けた。このように被害が続き収入が不安定になると、安定収入を求めて他産業に転換する若者や高齢農家の早期リタイア組の増加が予想され、担い手不足に拍車がかかるのではないかと懸念している。また、このまま何の対策も取らないと耕作放棄地が増えることが予想され、更には、鳥獣や害虫などの被害が拡大していくと推測される。

これらの問題とどう向き合っていくか、農業大学校で学びながらの友人との会話や父の今までの経験談等を聞き、自分が将来目指す経営計画が見えてきた。

一つ目は、収穫時期の分散である。二年連続の自然災害を目的の当たりにし、温州ミカン一本での経営に対する危機感を持った。そこで、収穫時期の異なる甘平のような中晩柑品種の導入や、天候の影響を受けにくいハウス栽培を取り入れ、収穫時期を分散することで、労働分散による適期収穫を確立

したい。

二つ目は、生産性と売上の向上だ。現在注目されている甘平や紅まどんなどを導入していきたいと考えている。この甘平、紅まどんは、愛媛県のみか研究所が育成した愛媛県独自のオリジナル品種で、価格の見通しがよく安定化が図れる柑橘である。また、ハウス栽培で高品質な果実を生産することで、より経営の安定化が図れる。ハウス設置の助成金を受けられるのが低コストで設置できるチャンスでもある。

三つ目は、農地造成による農地基盤の強化だ。農地を造成することにより作業効率、機械化による面積の拡大による所得の向上である。真穴地区には、ハウスを設置できる平坦地は少ないが、積極的に造成していけば十分な面積を確保できるのではないかと考える。また、作業効率の高い果樹園を作れば、各農家の管理できる面積も広がり、耕作放棄地の増加にも歯止めがかかると考えられる。労働負担が軽減すると高齢者の早期リタイアに歯止めがかかり、地域ぐるみでみかん産地が維持でき、後継者も継承しやすくなり、地域だけでなく職業とする農業がより活発になると考える。

これらを解決するためには、農業についての知識や技術を今まで以上に身に着ける必要がある。そのため、農業大学校での残り一年間の実習や先進農家体験を通して数多くのことを学び、

将来に生かしたい。

一方、私の学友が面白く頼もしい。愛媛県立農業大学校総合農学科一年五十五名、うち果樹専攻する学生十七名、これが私の学友である。この学友は農業を継ぐため、非農家で農業に興味があつての入学、農業高校に行ったから更に農業を勉強をしたく入学するなど、入学志望も様々で、もちろん農業に対する考え方も違うから面白い。また、将来の夢も違うから頼もしい。

卒業後は、この五十五名の学友の知恵とネットワークを共存し、住む地域や農業経営内容、職業など様々な学友の知恵をもらいながら地元に戻り地域を引っ張っていきける立派な農家になるのが私の大きな夢だ。



果樹コースの学友たちと